

たちだ。それゆえに、児童書の子どもたちは奇妙なほどに相似た姿を持つている。

そんな中で、一九九年には相似形を超えて躍動する子どもたちが目についた。

たとえば『しずかな魔女』（市川朔久子 岩崎書店）の早川ひかり四年生。

「すみませええん。ここに子どもさん、いませんか」。

夏休み、同じ四年生深山野枝の団地を訪ねてきたひかりは、「細い手足に小さな顔。くるくるとうずまき髪がぼうしからはみ出」て、「茶色がかった目はきらきらして」

「本に出てくるいたずら妖精みたい」に跳びはねる。野良ネコに喜び、アリに驚嘆し、思ったことが「すぐ口から出ちゃう、ジャーッと、シャワーみたいに」。見るもの、聞くものに純粹に反応して、跳びはねるひかりはまさに夏の光と一体化してまぶしい。そのまぶしさに野枝は惹かれ、読み手も惹かれ、救われていく。がしかし、このひかりは作中作の登場人物である。その外側の物語の登場人物である草子そして深津さんも救っていくのだ。二重構造の共同幻想の中で、いや、だからこそ、ひかりのまぶしさはより増す。一九九年、傑出の造形である。

このひかりに劣らず、明るくはじけて物語を牽引するのは、『あの子の秘密』（村上雅郁 フレーベル館）の転校生小六の三橋明来である。明来と、クラスの中で一人孤独に

本を読む倉本小夜子の二人の視点で交互に綴られる物語は、小夜子の硬く閉ざした暗い心象風景に比すること、楽しく明るい明来の造形がより光を放っている。実は、明来の素っ頓狂なほどの明るさの後ろには、秘密があり、すべて計算された「明るさ」ではある。しかし、それが、小夜子の持つ秘密と呼応したとき、明来の明と小夜子の暗が近づき、融合して、互いの秘密が昇華されていく。その過程で、読み手は明来が演じている明るさの根底に、真の優しさと純粹さが潜んでいるのを知る。そんな明来の造形に書き手の注意深い計算が透けて見え、作り物めいて見えることもあるが、充分魅力的である。

また、一八年まで、自己肯定感や本当の自分らしさを探すために、血のにじむような自己の心理分析をする、傷ついた子どもたちが散見されていたが、一九九年の子どもたちには、問題の解決あるいは脱出につながる、ある種、理性的な腑分けが身についたようにみえる。

『moja』（吉田桃子 講談社）の、中二の市毛理沙は、毛深い自分が大嫌いだ。小学生のとき、毛深さで「もじや」とからかわれてから、体を隠し、プールにも入らず、親にもいえず、カミソリで一人密かに毛剃りをする日々。それでももじやが生えてくる。毛深さによる自己否認と絶望に追い込まれていく中で、理沙は浮上のきっかけをつかむ。一人称で語られるその過程で、理沙は一つ一つの外的